

Book Review

協本健弘(横浜国立大学大学院准教授)

●完全な一致ではなく、「重なり」を見出すことから

高橋克徳

静かに分断する職場

—なぜ、社員の心が離れていくのか—

日本の学校が誇ってきた教員間の同僚性は、今や大きな岐路に立っています。「阿吽^{あうん}の呼吸」で仕事を進め、「先輩の背中を見て育つ」文化は、価値観が多様化した今日においてはむしろかしくなってきました。管理職や先輩教員は、若手へのかかわりに迷い、若手は旧来の働き方に共感できず、互いの本音が分らず距離を置くことも多いかもしれません。この現象を高橋克徳氏は「静かなる分断」と名づけています。

本書は、この状況をどう乗り越えるかを論じています。著者は、お互いの背景や価値観の違いを察して触れない、向き合えないという姿勢は、見えない壁を生み、職場のエンゲージメントが失われることを指摘しています。学校にお

いても、かかわりが薄れ、見えないう壁が生じると、さまざまな事態が起こります。若手と先輩教員に壁が生じれば、若手教員は教職に對してやりがいを感じる機会を失うかもしれません。授業や学級経営、校務分掌等の困難を先輩教員の支えのなかで乗り越え、成長すること、教職の魅力にますます引き込まれる経験は、現在では自然発生的には起きにくいかもしれません。ベテランやミドル教員も殻に籠もれば、教科横断的な学びやさまざまな教育課題の組織での対応がむずかしくなります。

このような状況に対し、本書は五つのカギを提案しています。それは、①自分の思い込みのフィルターをはずし、立場によって見える景色は異なるとの前提で多角的

に状況を見直すこと、②相手を責めず、その行動の背景にある心理を理解してかわること、③価値観の違いを認め合い、相手を想像しながら新しい意味や可能性をもに探究する「対話」をすること、④そのなかで「当たり前」を問い直すこと、⑤互いの考えのなかに重なりあう価値観を見つけ、そこを起点に関係性を築くことです。本音を交わしつつも、完全な一致ではなく、この「重なり」を見出す姿勢が重要だと著者は主張します。

そして、本書では、この五つのカギを基本スタンスに、仕事・働き方・職場などの問い直しをテーマに、職場で対話の実践を行うことで、分断を乗り越えていくことを説明しています。多忙化する学



新書版 / 304頁
ディスカヴァー・
トゥエンティワン
定価1,430円(税込)

校のなかでは、お互いの思いや学校のあり方を考える機会が少ないかもしれません。しかし、こんな時代だからこそ、個々の存在を大切にし、それぞれの思いを共有し、どのような学校にしていきたいかを全教職員で対話を重ねることが不可欠です。それは、単にお互いの交流を深めたり、不満をなくしたりということではなく、教職員個々や組織の未来をつくるための協働的な探究活動にほかなりません。

著者は、こうした活動を通して、ミンツバークが提唱する「コミュニケーションシップ」——自分の居場所を得ることによって自分を取り戻して、さらに自身でその居場所をよりよいものにしていくとする姿——が職場に生まれると主張します。本書は、分断を超え、未来を切り拓くための具体的な一歩を、私たちに示してくれます。学校というコミュニケーションを活性化させたいと願う、すべての教育関係者に推薦します。